

近世災害における「世なおし」の呪文と 「泥の海」の終末

—1662 年の京都大地震と『かなめいし』—

朴 炳道

1. はじめに

日常生活の中でその日常を揺さぶる非日常的な事態が襲うと人間はそれを何らかのかたちで受け止め、ある行動をとる。このような「非日常的事態」の例として、地震や洪水・飢饉などの事態や戦争のような人間同士の争いが考えられる。そして、このような事態を表す言葉として昔からよく使われてきたものが「災害(disaster)」である⁽¹⁾。現代的な意味での「災害」の定義にはまだ一致したものがないが、その原因の自然性や人為性を考慮して「自然災害」や「人為災害」という区分をすることが一般的である。だが、前近代での「災害」の意味のなかではそうした区分はなされていなかった⁽²⁾。

非日常的事態としての「災害」が人間社会を襲う際に、それは個人や社会にどのような宗教的認識や反応そして実践を呼び起こすだろうか。こうした疑問に対して 3・11 東日本大震災以降、宗教学でも研究が活発に行われているものの⁽³⁾、前近代の災害にはまだその関心が及んでいない状況である。歴史学においては災害予知の観点から古代から近世までの様々な災害の被害時期や地域、状況などに関して近代初期から研究がなされているものの⁽⁴⁾、人々の認識や実践は重要な関心事ではなかった。

そうした乏しい問題意識の中で、早い時期に考察が行われた事例が 1855 年（安政 2）に起きた「安政江戸地震」である。「安政江戸地震」に焦点が合わせられた理由は、現在の東京という地域での大地震であったという点や、幕末維新时期というかなり近代に近い時期であったため、多くの資料が残されている点も考えられるが、地震後に出回った「鯰絵」という資料が大きな関心と呼んだことにも起因する。「鹿島神宮の祭神である鹿島大明神が要石で地震を起こす鯰を押さえているため、地震が起こらない」という神話的なナラティブに基づき、かわら版に描かれ、流通された鯰絵は当時の人々の中で非常に人気を集めた。そうした資料を発掘したオランダの民俗学者であるコルネリウス・アウエハントをはじめ、北原糸子などの歴史学者も「鯰絵」を資料として当時の民衆の認識や心理、行動を理解しようと試みたのである⁽⁵⁾。私もその議論に加え、修士論文では鯰絵に表われている象徴の衝突と変化を、当時の民衆の災害経験から形成された「世直し意識」として説明しようと試みたことがある⁽⁶⁾。

「鯰絵」には非日常的な事態として地震を経験した当時の人々のコスモロジーの変換が見られる。そのひとつが地震という非日常的な事態から平穏で豊かな日常的世界に戻ろうとする意識で、私はそれを「再生と回復の世直し」と称した。こうした意識を表す「鯰絵」には、鹿島大明神が

鯰を押さえていたり、人々が鯰を殴ったり、食べたりする形で描かれている。既に存在していた「鹿島大明神—要石—鯰」の「地震神話」のナラティブに基づいて描かれた絵ともいえるだろう。だが、鯰絵にはそのような内容以外にも、擬人化した鯰と鹿島大明神が争ったり、鯰が富裕層から金を奪ったりする内容のものもある。私はこうした鯰絵を、潜んでいた経済的な格差への認識や富裕層への不満の心理が、非日常的な事態の経験によって表われたものとして指摘し、その意識を「変革の世直し」と称したうえで、地震後に起きた一揆での民衆の意識とも比較した。そのような研究を通して、災害が呼び起こす感情や意識には多様な次元があり、その背景になる時代や文化によって既存の象徴をそのまま用いる場合もあるが、象徴の意味や構造を変容させる場合もあるということを示そうとしたのである。私を含め、このような「安政江戸地震」と「鯰絵」をめぐる研究は「災害」という非日常的な事態の経験が人々の意識や実践にどのような影響を及ぼしたのかという問題意識を近世民俗・民衆宗教史の観点から解釈しようとした研究の一例であるといえるだろう。

本稿では、そのような問題意識を拡張し、研究資料論として「災害見聞記」というものの重要性を指摘した上で、近世前期の災害見聞記である浅井了意の『かなめいし』を考察し、近世民俗・民衆宗教史における「災害」の意味を探る。

2. 「災害見聞記」の原型としての『方丈記』の意味

現代の災害に関する研究とは異なり、前近代の災害に関する研究はフィールド研究を通して直接に情報を得ることができないため、間接的な資料を用いるしかない。例えば考古学や地質学の研究のような事実関係に関する研究を参考しつつ、編纂歴史書、日記、文学作品(小説・随筆)、石碑、かわら版、絵画など多様な資料を利用する。上述した安政江戸地震に関する研究では、地震学からの被害研究、当時の新聞であるかわら版、鯰絵、日記(須藤由蔵の『藤岡屋日記』)、災害関連記録(『なみの日並』・『安政見聞録』・『安政見聞誌』)などが用いられてきた。

だが、ひとつの災害だけでなく、前近代の災害を全般的に視野に入れて研究する際には、体系的な資料論を立てる必要がある。そこでまず、考えられる資料群として「災害見聞記」と称せられるものがある。中世以降、編纂歴史書以外に災害自体に焦点をあわせた文章が登場する。その嚆矢となるのが鴨長明の『方丈記』(1212)である。鴨長明(1155-1216)は晩年、京都の郊外にある日野山に狭い庵を結び隠棲し、その庵内から当時の世間を観察して『方丈記』を記しており、それは「隠遁」あるいは「無常観」を表現した日本三大随筆のひとつとして高く評価されてきた。ところで、この『方丈記』を鴨長明の災害の経験や彼の見聞したことを書き記した「災害見聞記」として読むとその意味は変わってくる。その意味に関しては別に論じるべきであろうが、ここではその結論だけ簡略にまとめておく。

「災害見聞記」の原型としての『方丈記』⁽⁷⁾の意味は大きく四つの点から考えられる。まず、災害の種類を提示している点である。『方丈記』には安元の大火、治承の竜巻とその直後の福原京遷都、養和の飢饉と疫病、元暦の地震と津波が述べられており、既存の研究では「五大災厄・災害」としてよく指摘されてきた⁽⁸⁾。だが、内容的には五つの災害というより、「飢饉と疫病」、「地震と津波」のようにさらに連続的・複合的な災害の状況が提示されている。二つ目は災害への認識がうかがえる点である。従来、指摘されたような「無常の世」への認識も見られるが、末

世としての認識・神仏の警告・不思議な事件・仏教説や五行説による災害理解なども見られる。そのため、全体的に『方丈記』には「無常」の印象が強いといえるが、災害への認識が「無常」だけとは言い切れないのである。次に、災害に対する実践も記されている点である。災害除けの呪術や祈祷・修法もあるが、^{りゅうぎょう}隆 曉 法印のような宗教者の死者への慰霊の姿も描かれている点も看過してはいけない。そして、最後にもっとも重要だと思われるが、以降の災害見聞記へ至大なる影響を及ぼしたという点である。とくに出版文化が発達した江戸時代の災害の状況を描いた文章のなかには「鴨長明」の名前が登場したり、『方丈記』の引用やその表現を真似したりしたものも多い。その例としては、寛永の飢饉の記録である『薬師通夜物語』(1641-1643)、明暦の大火の記録である『むさしあぶみ』(浅井了意, 1661)、京都大地震の記録である『かなめいし』(浅井了意, 1662)がある。たとえば、次の章から本格的に分析する『かなめいし』の下巻には「鴨長明が方丈記にこの事をかきのせしは、さこそ大なみにてはべりけめ」⁹⁾と述べている部分があり、「鴨長明」や『方丈記』からの影響が直接に表われている。それ以外にも 1675 年の飢饉の記録である『犬方丈記』(1682)や杉田玄白が書いたとされる『後見草』(1787)、そして 1830 年の京都地震の記録である『地震考』(1830)にもその影響が見られる。

「災害見聞記」としての『方丈記』には、上述のように、①どのような事態を「災害」と呼んだのか、②災害をどのように受け止めたのか、③災害の事態にあたってどのような行動をとったのかなどが描かれていたのである。そして、④その影響をうけながら、活発していく江戸時代の出版文化のなかで、災害をめぐる人々の認識や実践がうかがえる「災害見聞記」と呼べる文章が多く生産されたのである。ところで、このような文章は、今まで単なる文学作品(報告文学・ルポルタージュ文学・ノンフィクション)、あるいは被害状況がうかがえる「史料」としてだけ扱われてきた傾向がある。だが、このような資料群を人類学や社会学でのフィールド観察記録やインタビュー資料のように積極的に読み込むと今まで見えてこなかった生々しい人々の認識や実践を視野にいれて研究することができると思われる。そのため、災害の体験記録・見聞記録を「災害見聞記」と称し、近世民俗・民衆宗教史のなかでの災害の意味を探る主な資料として用いることには大きな意味があるだろう。そうした研究の一環として、本稿では近世前期に書かれた『かなめいし』という「災害見聞記」を取り上げる。

3. 近世地震の災害見聞記：浅井了意の『かなめいし』

3-1 浅井了意と『かなめいし』

まず、『かなめいし』はどのような文献であり、誰がどのような目的で書いたものなのかということから考えてみよう。『かなめいし』という文献には作者署名はないが、1670年に刊行された『増補書籍目録』やその後の書籍目録に作者を「松雲」あるいは「了意」と記していることから、浅井了意が記したものと推定されている¹⁰⁾。浅井了意(?-1691)という人物に関しては、不明な点が多いが、江戸前期の浄土真宗の僧で仮名草子の作家としてよく知られている。了意は法号であり、別号としては瓢水子・松雲などを使った。仏教・儒教・神道に通じたとも云われ、仏教書・和歌・古典などの注釈書を著す一方、『江戸名所記』『東海道名所記』などの名所記や『伽婢子』のような怪奇物も記しており、多岐にわたる著述を残したのである。そのなかに「災害見聞記」として『むさしあぶみ』と『かなめいし』がある。

『かなめいし』は上・中・下の三巻で、上巻は十章、中巻は八章、下巻は四章の構成となる。成立は1662年（寛文2）、刊行は1663年（寛文3）と考えられる。その内容は寛文二年五月一日に京都を中心として起きた大地震に関するもので、地震が起きてからの被害状況、死者の発生、噂、人々の行動など見聞したことを記録し、その上で自分の考えを加えている。浅井了意がその二年前に書いた江戸の明暦の大火の記録である『むさしあぶみ』の姉妹編ともいわれる。本稿では大洲市立図書館矢野玄道文庫本を底本とした小学館の『新編日本古典文学全集 64 仮名草子集』の『かなめいし』を用いる。矢野文庫本は、現在知られている唯一の完本である。

3-2 『かなめいし』に関する先行研究

『かなめいし』に関する先行研究は主に日本文学研究から行われ、仮名で書かれた江戸前期の文学ジャンルを称する「仮名草子」のひとつの作品として研究されてきた。1971年に翻刻された以降⁽¹¹⁾、本格的な研究が始まり、仮名草子としてのその記録の正しさ（記録性）と虚構化（文芸性）が中心問題となってきた⁽¹²⁾。『かなめいし』の「記録性」に関しては他の史料での被害記録と比べてみても間違っているところがあるという指摘がありつつ、その「文芸性」の面では作家の観点から潤色した部分は所々みられるという意見がある⁽¹³⁾。

他の分野からの研究はほとんどないが、内容を中心に上げたものとして宮田登の研究がある⁽¹⁴⁾。宮田登の研究は、『かなめいし』から「世直し」・「泥の海」という言葉を取り出し、彼のミロク信仰研究と関連した近世日本民衆の終末観の一例として指摘したという点で非常に重要である。だが、『かなめいし』を全体的に分析したというより、一部分だけの言及に止まっているため、地震災害の際にみられる人間の反応や実践の面に焦点をあわせたさらなる研究が必要であると思われる。そこから『かなめいし』という資料の重要性も明らかにされるだろう。本稿では、そのような視覚から『かなめいし』に描かれている当時の人々の地震災害除けの実践と終末観を中心に扱う。だが、その前に浅井了意が『かなめいし』をどのような観点から記したのかを考察する必要がある。

3-3 浅井了意の災害観と叙述の性格

浅井了意は『かなめいし』三巻を通して、自分の地震災害観に基づいて当時の被害や人々の様子を描いている。そのため、浅井了意が「地震災害」をどのようなものかと思ったのかという「災害観」を考えなければならない。浅井了意が僧侶であったことも一つの理由になると思われるが、彼は仏教的世界観に基づいて地震現象を理解している。それは、世界の中心である須弥山の下に世界を支える四種の大円輪（空輪－金輪－水輪－風輪）があり、最下の層の風輪が動く連鎖的に揺れて地震が起るとする説であり、浅井了意は地震を止める方法がないと思っている⁽¹⁵⁾。このような地震理解は、すでに日本中世にかなり広がっていたものであり、彼自身だけの考えではなかった⁽¹⁶⁾。だが、『かなめいし』にはそのような地震災害観をもたない当時の人々、あるいは民衆と呼べる人々の多様な認識や実践を描いている。そのため、浅井了意の彼らへの認識や実践に対する態度は非常に批判的である。次の章から考察する地震除けの呪術や祈祷、寺社での託宣などの行動を、意味がないと判断し、「知恵が浅い」、「愚か者」の「馬鹿げた」行動であると彼らを評価しているのである。

このような書き手の認識と書かれていた者の認識の差は『かなめいし』の災害観において非常

に重要な意味をもつ。一つは当時の地震災害認識が統一的ではなく、階層によって異なっていた点である。そして、二つ目は、浅井了意自身の認識とは異なるにもかかわらず、非常に詳しく当時の人々の行動を記録したという点である。それは、ただの見聞の記録という面よりは、『かなめいし』を通して、自分の理解の妥当性を表し、そのような理解を広めようとする意図、すなわち「啓蒙教訓」的な目的があったのでないかとも考えられる。最後に、『かなめいし』に描かれている民衆の宗教的認識や実践の歴史的な実在性が、浅井了意の彼らに対する批判によって担保されるということである。『かなめいし』に記されている被害状況に関しては先行研究の考察から、他の資料の被害記録とも異なる点がないと上でも述べたが、地震災害をめぐる宗教的認識や実践の内容に対しては、そのような認識や実践が実際に存在していたかどうか検証する方法がないのである。そのような限界があるものの、『かなめいし』に見られる著者の批判的な観点を考慮すると、その批判の対象になる内容を恣意的に作る必要性はあまりないと言えるだろう。そうした点で、『かなめいし』に描かれた当時の人々の姿を単なる文学的な表現以上のものとして受け止めることが可能になるのである。次の章では、このような浅井了意の観点到注意しつつ、描かれていた当時の人々の災害に対する多様な実践と認識を「災害除けの呪術・信仰」、そして「災害が呼び起こす終末観」という二つの観点から考察する。

4. 『かなめいし』に表れている災害除けの呪術と信仰

災害という非日常的な事態が襲うとそこから脱しようとするのが人間の一般的な行動であろう。そうした行動のなかに宗教的な実践もみられ、代表的な例が呪術や祈祷のようなものである。中世ヨーロッパの災害とそれに対する実践を研究したジュシ・ハンスカは聖人への祈祷、教会でのミサなどを主な災害除けの実践として提示している⁽¹⁷⁾。従来の日本の民俗・民衆宗教研究では「災害除けの実践」に関してはあまり関心をもたれていない状況である。広い観点では、病氣や戦争・伝染病・飢饉などの個人や社会に害を与える事態に対する一般的な措置として、寺社での読経や祈祷、修行などの実践が古代から行われてきたという指摘はすであつたが、具体的な状況にどのような階層の人がいかなる行動をとっていたのかという点に関しては、まだ明らかにされていないところが多い。とくに地震や水害、伝染病、飢饉などの「災害」と認識された状況における個人や社会の宗教的実践の具体的な様子に関しては、ほとんど知らされていないといっても過言ではない。こうした研究状況のなかで、『かなめいし』は近世前期に京都で起きた地震に対する人々の具体的な宗教的実践を描いている点で非常に重要な意味をもつ。『かなめいし』には、主に四つの地震除けの実践がみられ、災害除けの呪文を唱えることや札や草葉を家に貼ること、そして神社での神子による託宣、最後に当時広く知られている地震信仰として「鹿島信仰」が記されている。

4-1 地震除けの呪文「世なおし」——「世直し」の初出

「世直し」という言葉は1855年の安政江戸地震以降に出回った鯰絵の詞書のなかによくでる表現であり⁽¹⁸⁾、この言葉を修士論文では地震災害を経験した当時の人々の二つの心性を表す概念としても提示したことを上でも述べた。今日では「世直し」という言葉は新聞やニュースでも見

られるほど日常的に使われているが、この言葉の歴史とそれが使われた文脈を考えると様々な意味合いをもっていたことがわかる。

「世直し」という言葉が知られ始めたのは、地震の時に唱える呪文としてである。関西地方では「よなおし」、そして関東地域では「万歳楽」と唱えたという⁽¹⁹⁾。こうした指摘はあまり検証されず、柳田國男、コルネリウス・アウエハント、宮田登や安丸良夫など著名な学者の著作で述べられ、以降の研究では「民衆の変革思想」を指す用語としてもよく用いられるようになる⁽²⁰⁾。歴史学でも幕末の世直し一揆などの研究から時代認識論まで幅広く語られてきた⁽²¹⁾。だが、こうした「よなおし」という言葉がいつ、どのような状況で使われはじめたのかという指摘はいまだなかったのである。それを追跡すると「よなおし」の初出は『かなめいし』に辿り着くということとをここで指摘したい。現在のところ、『かなめいし』以前の資料で地震除けの呪文として「よなおし」が唱えられたことは見当たらず、「よなおし」という言葉自体も出てこない⁽²²⁾。

『かなめいし』で「よなおし」は地震勃発を語っている上巻の一章「地震ゆりいだしの事」の最初の部分で出ている。

今年は寛文第二 壬寅^{みづのえとら}の年（中略）丑寅^{うしとら}のかたより、何とは知らず、どう／＼と鳴りひびきて、ゆりいだす。上下、地震とは思ひもよらざりけるが、しきりにゆらめきければ、諸人ころづきて、初めのほどは「世^よなをし／＼^な」といひけれども、大家^{たいけ}・小家^{せうけ}、めき／＼として、動きふるふ事おびたしかりければ「すはや世^{めつ}が滅^{めつ}して、只今泥^{ただいまどろ}の海になるぞや」と、いふほどこそありけれ、京中の諸人、上を下にもてかへし、大道^{だいだう}をさして逃げ出づる。（上巻一章、14 頁）⁽²³⁾

寛文二年の地震はどうぞうという音とともに襲ってきた。誰も地震と気づいていない間に、地面が揺れ始めたので、地震だとみな気づき、「世なおし、世なおし」と唱えたのである。だが、地震は止まず、揺れはさらに激しくなったので、「世が滅んで、今にも『泥の海』になるぞ」と思いながら逃げ出したのである。ここで「泥の海」という終末観が現れているが、これに関しては本稿の五章で詳しく考察する。

地震の揺れの最初のところに「世なおし」という呪文を唱えたことは何を意味するのだろうか。まず、「世なおし」の意味から考えなければならないだろう。しかし、「世」と「なおす」が正確にどのような意味で使われたのかこの文脈では判断することはできない。「なおす」は「直す」・「治す」の意味で考えられるが、ここでは「なおす」の対象になる「世」を考えるとどちらも可能性がある。そのため、「世なおし」の意味は大きく「非日常的な世を日常的な世に直す・治す」という意味をもつのであろう。ここでのなおすべき「世」がどの世なのかによって「世なおし」の意味は様々文脈で用いられる可能性をもつのである。そのため、18・19 世紀に至っては一揆の指導者を「世直し大明神」と称して崇めたり⁽²⁴⁾、さらには「変革」を表す学術概念としても用いたりするようになったのである。「世なおし」の意味や概念の変遷については、さらなる考察が必要であると思われるが、本稿ではその言葉自体が近世前期にすでに地震除けの呪文として広く使われていたことが確認できたことを強調したい。

4-2 「歌」を「札」に書いて貼る

地震の被害を防ぐために、あるいは地震を止めるために、家に何かを貼ることは 1855 年の安政江戸地震の時にもよくみられる地震除けの呪術であった。「鯰絵」の中にもこうした呪術的な目的に使うために描かれたものがある。たとえば、<鯰絵 No.61>⁽²⁵⁾では地震を起こした鯰を災いの元凶として見ているため、その鯰に怒りを表出しており、刀、つち、棒などで鯰を攻撃している。また、この鯰絵の右側上段には「鯰退治」という文句が、左側上段には梵語で「東西南北天井へ此ふだをはりおけハ、家のつぶるるうれひさらになし」と書いており、その災害除けのための呪術的な目的をはっきり表している。一方、『かなめいし』では地震災害除けのために、歌を札に書いたものや神社の草葉などを家に貼ったり掛けたりした様子が見えてくる。

まず、上巻の九章「^{はう／＼こ}方々小屋^やがけ付^{かどばしら}門柱^{うた}に歌^はを張りける事」には、この章のタイトルとおり、歌を札に書いて門柱に貼りつけることが描かれている。

何ものの仕^しいだしけん、禁中^{きんちゆう}よりい^{このうた}だされて、此歌^{ふだ}を札^{かどばしら}に書いて、家々の門柱^{かどばしら}に押しぬれば、大なるふり止^やむとて、「棟^{むね}は八^やつ門^{かど}は九^{この}つ戸^とはひとつ 身はいざなぎの内にこそすめ」諸人、写し伝へて、札に書き、家々の門柱に押しけれども、地震はやまず。(上巻九章、36 頁)

最初の地震で家屋が崩壊する可能性があったため、多くの人々は町の広い場所や十字路の間に小屋を建てて避難生活をする。しかし、余震が続いたため、不安はさらに広がる。そのとき、誰が始めたのかは知らないが、宮中から出た歌を札に書いて、家々の門柱に貼り付ければ、地震がやむという噂が流れたのである。人々はこの歌を書き写して伝え、札に書き、家々の門柱に貼った。引用部分の次の部分では、この歌が昔の慶長の地震の時に人々が唱えた歌だったという当時の老人の話があり、「棟は八つ門は九つ戸はひとつ 身はいざなぎの内にこそすめ」という歌も一種の地震除けの呪文であった可能性がある。

また、歌を書いて貼る行動は地震以外に疫病の時にもあったと浅井了意は指摘している。

えきれい疫病^{えきれい}のはやりしころ、京中家々に「花かごや」といへる歌を書きて、^{かど／＼}門々^はに張りける事の侍べり。(上巻九章、37 頁)

いつのことだったかは知らないが、疫病の流行した時、京中の家々で「花かごや」という歌を書いて、門に貼ったことがあったのである。そのため、歌を札に書いて貼ることは災害除けの呪術として広く行われたとも考えられる。このような呪術に使われた呪文としての歌の意味はどのように解釈できるのだろうか。浅井了意はこのような歌の意味に関して「すべての哥のこころ、いかなる事ともしりがたし」といい、その意味は理解しがたいと述べている。興味深いところは、この指摘の上で浅井了意がこの呪術的な実践を評価している九章の最後の部分である。

この哥のたぐひにや、世^{ぐぞく}の愚俗^{ぐぞく}ども、物のまじなひに哥をと^{おほ}なふる事あり。その哥どもは、大^{おほ}かたは、わけもなき片言^{かたこと}多し。これも人の氣^きを転^{てん}じて、ゆるやかになす事あり。腫物^{はれもの}、瘡^{おこり}、

魚の鰾^{うを ほね}、山桙^{さんせう}にむせたるなど、みなよくなれるためし少なからず。諸人、せめて恐ろしさの胸やすめに、写し伝へて、門々に押しけるも、愚かながらもことはり也。(上巻九章, 37 頁)

ここで浅井了意は、「世の中の愚か者どもが、何かのまじないに歌を唱えること」があり、「その歌は、だいたいにおいて、意味もない戯言が多い」と否定的に評価している。だが、このような呪術的な実践の意味を全面的に批判しているというより、「これも人の気持ちを変えて、穏やかにすることがある」とその心理的な効果を認めており、呪術の心理機能主義的な面を指摘している。呪術的な行為自体が地震を止めることはできないが、安心感をもたらすことはできるため、その行動は「愚かなことではあるが、もっともなことである」と理解したのである。こうした態度は、自分の考えとは異なるものの、当時の人々の行動を何らかの論理で理解しようと試みた点で非常に重要な意味をもつ。

一方、中巻の七章「豊国^{とよくに}はなゆのゆらずとて諸人参詣の事」には、歌を書いて貼ることではないが、地震除けのために豊国神社の庭の草葉を家の軒にかけることが描かれている。京都の豊国神社は豊臣秀吉を「豊国大明神」として祭る神社で、この辺りでは、少しも地震の揺れがなかったという噂があり、多くの人々が参詣するようになった。「神前には散米や散銭を山のように投げ入れ申し上げ、皆々手を合せて、『南無豊国大明神』と拝み申し上げ」たのである。この時にただの参詣で終らず、人々は庭の草葉を取って帰る。

さてもまいりつどふ諸人、手ごとに庭の草葉をかなぐりて、家にとりてかへり、をの／＼軒にかけたり。いかなる者の、何事によりて仕そめたりけん、おぼつかなし。(中略) 家々の軒につるしかけたる人の心ばせ、豊国にあやかりて町屋^{まちや}もゆらであらなんと思ひける成るべし。おろかにも惑^{まど}ひはてて、をこがましかりけり。(中巻七章, 59 頁)

参詣に集る人々は、各々がその手に庭の草葉を引きむしり、家にとって帰り、それぞれ家の軒にかけた。これを誰がどのような理由で始めたのか、よくわからないと浅井了意はいう。だが、その理由として浅井了意はフレイザーの模倣呪術や感染呪術の呪術論と類似した説明をしているところが興味深い。すなわち、豊国の庭の草葉には地震には揺れない豊国神社の力があると考えられるため、豊国にあやかて草葉を家の軒にかければ、町屋も揺れないという考えからそのように行動したと理解したのである。しかし、ここでは、歌を札に書いて貼る行為の心理機能主義的な面を認めたこととは異なり、「愚かにもあれこれ思い悩んで、馬鹿げた次第であつた」と否定的な評価にとどまっている。

4-3 神がかりと託宣

『かなめいし』には民間宗教者や神社の神子などによる神がかりや託宣の内容が詳しく述べられている。地震災害に襲われた人々は、その地震を神の仕業だと思い、神子の神がかりを通して地震を止めてほしいと祈願をする一方、今回の地震の意味や今後の予想を聞いたのである。中巻の二章「諸社の神託^{しんたく}の事」ではまず、今回の地震をきっかけに神社で人々が行ったことを全体的に描いてから、具体的な三つの神がかりと託宣の内容を提示している。

京都はいふにをよばず、^{あなかへんど}田舎边上の^{ざいがう}村里在郷かたの^{ほくら}禿倉・^{こみや}小宮までも、^{にはか}俄に神前の草をむしり、^{とうみやう}灯明をかかけ、^{へいはく}幣帛・^{ごくう}御供をそなへ、^{ざんまい}散米・^{みき}御酒をたてまつり、^{なほ}猶そのうへに湯をまいらせ、^{ついでう}さま／＼に追従いたし、「このなゆ止め給へ」と祈るほどに、^{ひごろ}神々の御託宣、^{しゆつくい}日比の述懷を仰せらるるこそまが／＼しけれ。(中巻二章、71頁)

京都とその周辺の村里や田舎にある祠や小さな宮では、神社をきれいにしたあとに御幣や供物を供えて、湯立ての神事まで奉納して「この地震を止めたまえ」と神に祈願した。そして神々の託宣は、神社の管理を怠ったことなど日頃の不平を述べる内容だったのである。具体的な神がかりと託宣の内容を見てみよう。現在、大津の天孫神社の別称である四の宮では、地震が起ってから三日後となる五月四日、五十歳ごろの神子が湯立て神事を行い、託宣をもらった。その内容は次のようである。

その御託宣のこと葉にいはく、「いかに^{ぐはんにん}願人よ／＼、^{ただいま}只今湯をくれて、^{さんねつ}三熱の苦しみのたすかりたるこそうれしけれ。大なゆがゆりて^{おそろ}恐しさに、^{まる}丸に祈りをかくるよな。丸もきづかひをするぞ。^{ただいま}只今もゆりたる地震に、丸もおそろしくて、^{うちこ}杉の本へとびあがりたり。氏子ども^{こわ}の強がるは道理かな。さりながら、丸が心を推量せよ。^{うちこ}氏子どもを随分まらうとは思へども、なゆのゆるたびに、丸が胸がをどりて、まもりつめて居られぬぞ。只その身／＼によく／＼用心をせよや」とて、神はあがらせ給ひけり。(中巻二章、73-74頁)

神は湯立ての奉納には感謝したが、自分も地震が恐ろしいという意外な告白をする。氏子を守りたいが自分の胸がドキドキして守ることができないと弁明をしており、地震は神の力を超えたものだと話しているのである。このような託宣は、同じ神子が山科の諸羽神社で湯立てを行ってもらった託宣の内容とも類似する。諸羽神社の祭神である^{もろは}諸羽大明神は次のような託宣を下す。

「いかに^{うちこ}氏子ども、よく聞け。この年月、日ごろは丸をあるものかと思はず、^{しやだん}社壇も^{はいでん}拝殿もこをれかたぶき、庭には草のみ生ひ茂り、まことにさびしさいふばかりなし。詣でくる人もなく、^{ごくう}灯明をかかぐることもなし。いはんや^{かぐら}神楽などは、まつりの日より外には聞かず。御供もその日のままにて、供ふることなし。あまりのさびしさには、^い鳥井のもとに立ち出でて、^{わうらい}往來の旅人をみて、^{あむま}こころをなぐさむばかり也。日ごろ掛けたる^え絵馬どもは、^あ雨露にさらされ、^え絵の具はげて、のるべきやうもなし。いづかたに何事のあればとて、^{うちこ}かけ出づべきたよりを失なひ、^{しゆつくい}れき／＼の神たちにあなづられ、^{しわざ}をとしめらるるは、みな氏子どもの所為ぞかし。かやうの折から^{しゆつくい}述懷をせずは、^{ただいま}今より後も、丸を捨てものにすべし。それに^{さんねつ}只今めづらしき湯をくれて、^{にはか}しばらく^{さんねつ}三熱の苦しみをたすかり、^はこころも^{たの}すずやかに^{たの}おぼえたり。このほどの地震がおそろしさに、^{にはか}俄に置かぬものを尋ぬるやうに丸が所へ来たりて、^{やしろ}頼みを^{はいでん}かくるかや。地震のゆるたびに、^{やしろ}社も^{はいでん}拝殿もくづれさうにて気づかひなれば、これをくづされては、重ねて立ててくるる者はあるまじ。いかにもしてくづさじと、用心にひまがなければ、湯をくれたるはうれしけれども、なゆの事は、丸がちからわざにならぬぞ。只用心

をよくせよ」とて、神はあがり給ひぬ。(中巻二章, 75-76 頁)

この託宣も四の宮での託宣よりは長いが、その内容にはあまり変化がない。神は日頃に神社を管理していなかったことや人々が参詣しに來なかったことなど不平を表出したあと、珍しく湯立てを奉納したことに嬉しがる。しかし、地震は神の仕業ではないため、各自が用心するしかないと言って去ってしまう。

三つ目は京都の西の京、木辻の牛頭天王^{ごず}の託宣であるが、その内容も上述した託宣とそれほど変わらない。ただ、ここでは牛頭天王がさらに格式の高い神々に地震に関して尋ねる部分があり、神の世界のヒエラルキーを示している点が興味深い。しかし、格式の高い神々も「むかしもかやうにゆり初めては、久しくゆりたるためしあり。さりながら、別条^{べちでう}あるまじとは思へども、それを知らず」と言っており、地震に関しては分からないし、できることもないと神と地震との関連を否認しているのである。それから牛頭天王は人々が地震用心のために注意すべきことを教えてくれる。その用心の内容は「地割れがしそうなら、板戸を敷きなさい」とか「板戸を夜も昼も開け放しにきなさい」などであり、神からの教えとしての意味はあまりなく、「かような事は、御託宣までもなし。いかなる者も心得たる事也」と笑う人もいたのである。

このような三つの託宣の内容をどのように受け止められるだろうか。まずは、二章の最初の部分で述べているように、地震のあとに諸社で湯立てなどの神事を行い、神子が託宣をもらったことがあったとしても、問題はこの託宣の内容である。このような内容を神子が神がかりの状態で本当に神からもらったものなのか判断することはできない。ただ、託宣の内容で神も地震が起つた理由を知らず、止める方策も知らないという点に注目する必要がある。すでにふれたように、浅井了意は地震が神の仕業であるという説明を否定しており、仏教的な世界観に基づいて地震を理解している。そのため、託宣の内容を潤色、あるいは創作した可能性が高いと思われる。三つの託宣の構造や内容がほとんど同じであり、一貫して神と地震の関係を否定しているからである。しかし、当時の人々の神社参詣や湯立ての様子、そして神がかりと託宣の内容の構造が描かれている点では、当時の宗教実践の理解に非常に重要な資料であると考えられる。

4-4 「鹿島信仰」：鹿島大明神・要石・竜

『かなめいし』で提示されている地震災害と関連したもうひとつの信仰は、この著書のタイトルと関連がある。『かなめいし』では、なぜそのタイトルを「かなめいし」にしたのかに関して、下巻の最後の章である四章「なゆといふ事付東坡^{とうば}の詩の事」で述べている。「かなめいし」というものは、当時広く知られていた「鹿島信仰」との関連で出る言葉である。この「鹿島信仰」は、すでにふれた 1855 年の安政江戸地震の後に、かわら版の形で出回った「鯰絵」のモチーフになった地震信仰である。

俗説^{ぞくせつ}に、五帝竜王^{ごていりゅうおう}、この世界^{せかい}をたもち、竜王^{りゅうおう}いかる時は、大地ふるふ。鹿嶋^{かしま}の明神、かの五帝竜^{ごていりゅう}をしたがへ、尾首^{おかしら}を一所にくぐめて、鹿目^{かなめ}の石^{いし}をうち置かせ給ふゆへに、いかばかりゆるとても、人間世界^{にんげんせかい}は滅する事なしとて、むかしの人の歌^{うた}に、「ゆるぐともよもやぬけじのかなめいし かしまの神のあらんかぎりは」この俗歌^{ぞくか}によりて、地震^きの記^きをしるしつつ、名

づけて要石といふならし。(下巻四章, 83頁)

1855年の「鯰絵」では、地震の起こす鯰を鹿島大明神が要石で押えているという内容であるが、江戸前期に書かれた『かなめいし』では、鯰の代わりに「竜王」が地震を起こす存在として登場する。地震の起こす存在が江戸前期から末期に至る過程のなかで、竜から鯰に変化したことをここから推測できるのである。中世日本では日本国土を蛇、あるいは竜のようなものが取り囲んでおり、地中には竜が棲んでいたと考えられていたことは黒田日出男などによってすでに指摘されている⁽²⁶⁾。その想像が続いて江戸前期にはまだ「竜」の存在が信じられていたのである。ここでは、その存在を押える道具である「要石」から著書のタイトルを「かなめいし」にしたことを述べており、今回の地震と関連した具体的な鹿島信仰の様子は描かれていないのである。そのため、鹿島信仰がこの段階では単なる俗説としての物語にすぎなかったのか、あるいは竜王・鹿島大明神・要石に対する実践が存在したのかは分かりにくいのである。ただ『かなめいし』から、江戸前期には鹿島信仰のナラティブが存在したことを確認できたことに意味があると思われる。

5. 『かなめいし』の終末論——「災害終末」(Disaster Apocalypse)のイメージ

古代メソポタミアの神話を描いているギルガメシュ叙事詩、ヘブライ聖書の創世記のノアの話、中国古代の神話において「洪水」はカオスの象徴として用いられており、古代イランの宗教においては「地震」がそうである⁽²⁷⁾。世界宗教史における「災害」の象徴は、神話や儀礼の言説のなかで終末、あるいは神からの刑罰などを表す事態として大きな役割を担っているのである。

一方、神話的な言説とは別に、歴史上の事件としては、災害が千年王国運動、あるいは反乱や社会変革、ひいては革命を引き起こす背景になるのではないかという疑問が提示されてきた。中世ヨーロッパの千年王国運動の代表的な研究である『千年王国の追求』⁽²⁸⁾で、歴史学者ノーマン・コーンは千年王国運動の前兆として地震や飢饉などの災害があったことに何らかの意味があるのではないかと述べている。その問題意識を引き継いだ政治学者マイケル・パークンは『災害と千年王国』⁽²⁹⁾という研究で、災害が千年王国運動の大きな契機になりうることを指摘した。しかし、パークンの研究は災害や千年王国の範囲を広く設定しているため、災害が宗教運動や終末意識へ及ぼした影響に関する本格的な研究とはいえない面がある⁽³⁰⁾。日本においては、パークンの著書を翻訳した北原糸子によって安政江戸地震後の民衆が「災害ユートピア」を経験したと指摘されている⁽³¹⁾。災害後に幕府からの施行などの救済政策によって生活が豊かになったことや、小屋での避難生活のなかで被災共同体が形成されたことから、一時的でありながら災害による「ユートピア」が現れたと解釈したのである。鯰絵のなかで肯定的に描かれた鯰もそのような意識を表したものとして説明している。

だが、「災害」のもつ宗教的意味に関する研究は神話・儀礼的言説に関するものにせよ、歴史上の事件に関するものにせよ、それほど本格的なテーマとしては取り上げられていない状況といえよう。『かなめいし』は、そのような状況のなかで近世日本の早い時期に見られる「災害によるコスモロジーの転換」、さらに具体的にいえば当時の人々の「終末の意識」が描かれている点で非常に重要である。

5-1 日本における代表的な終末のイメージ：「泥の海」

日本の終末観のひとつとしてよく指摘されてきたものが「泥の海」である。この言葉がよく知られたのは日本民衆宗教や新宗教の研究のなかで、それらの創造論や終末論のイメージとして指摘されてきたからである。富士講、如来教、天理教、大本教がその例である⁽³²⁾。たとえば、天理教の教祖である中山みきが人間世界の創造を説き明かしたことを記録した『泥海古記』には、そのタイトルからもわかるように、世界の原始的なカオス状態を「泥の海」として描いている。こうした「泥の海」という表現の出典を探ると、今の段階で『かなめいし』に出る「泥の海」がその言葉の初出であると判断される。『かなめいし』のなかで「泥の海」という表現は四回出ており、その最初は地震勃発の際である。

地震とは思ひもよらざりけるが、しきりにゆらめきければ、諸人ころづきて、初めのほどは「世なをし／＼」といひけれども、^{たいけ}大家・^{せうけ}小家、めき／＼として、動きふるふ事おびたたしかりければ「すはや世が滅して、^{めつ}只今泥の海になるぞや」と、いふほどこそありけれ、京中の諸人、上を下にもてかへし、^{ただいま}大道をさして逃げ出づる。(上巻一章、14 頁)

この部分は三章の「世なおし」の呪文を考察したときにすでに引用した。地震が起きて地震除けの呪文として「世なおし」を唱えても地震が止まらなると「世が滅んで、今にも泥の海になるぞ」と考えたのである。ここでの「泥の海」は地震によって世界が滅んだあとのイメージである。次は上巻の七章「^{きよみづ}清水の^{せきたう}石塔并^{ぎをん}祇園の^{いし}石の^{とりゐたを}鳥居倒るる事」で清水寺や祇園の被害状況を描いているところである。

^{やさか}八坂の^{ちやや}茶屋共は、^{きも}鳥居の倒るる音に、いよ／＼肝をけし、「さればこそ、地の底がぬけて、泥の海になるぞや」とて、^{けんになじ}建仁寺のうしろなる^{のばら}野原をくだりにかけ出でたり。(上巻七章、28 頁)

ここで八坂の色茶屋の者たちは、地震の揺れに加えて、鳥居の倒れる音に驚き、「地の底がぬけて、泥の海になるぞ」と考えている。ここでは地の底が抜けてから「泥の海」になる過程であるが、具体的にどのような過程なのかは分かりにくい。地震災害による終末として「泥の海」のような具体的なイメージまでは至らないが、漠然とした世の終りを描いている部分もある。

間もなくゆりて、しかも雨さへふり出でつつ、かみなり^{きは}騒ぎにうちそへ、「この行末の世の中は、何となりはつべき事ぞや」と、おや^こ子兄弟、たがひに手を取り^{ひたい}額をあはせ、(後略)(上巻九章、35 頁)

絶え間なく地震で揺れて、しかもそのうえ雨まで降りだし、激しい雷も加わったとき、「この先、世の中は、どうなってしまうことか」と具体的ではないが世の先を心配しているところがある一方、もうすこし具体的な世の終りを語っているところもある。

西山のかたより、光り物とび出でて、比叡^{ひゑ}の山の峯をさして行く事、さしもはやからず。その大きさ、貝桶^{かいおけ}ほどにて、あかき事火のごとし。しづかにとびて、山にかくれたり。諸人このよしを見て、「いかさま只事^{ただごと}にあらず。世の中滅^{めつ}して、人種^{ひとだぬ}あるまじ」などいひののしる。(上巻十章、38頁)

上巻の十章「光り物のとびたる事」では、地震の揺れが続いている中で西山の方から光り物が飛び出して、比叡山の峰を目ざして飛んで行くことがあった。このような不思議な事態に「きつと、ただことではないぞ。世の中が滅んで、人間がいなくなるだろう」と人間がいなくなる終末を想像したのである。このような浅井了意の叙述をみる限り、地震災害が起こったり、それに加えて他の不思議な事件が起こったりすると、「世の終り」を想像することはかなり一般的であり、そのなかで人間がいなくなり、泥の海になると想像することが多かったのである。

5-2 「泥の海」のカオスと「液状化現象」(Soil Liquefaction)

こうした「泥の海」は江戸中期や末期にかけて登場する新宗教の教義の中でも語られ、日本の終末観の代表的なイメージとして指摘されてきたが、それがどこから始まったイメージなのかは問われたことがない。『かなめいし』では、「泥の海」が初出するだけでなく、そのイメージの誕生の過程も描いていると思われる。それは地震の際に、地下水位の高い砂地盤が振動により液体状になる現象で、現代の地震学の用語でいうと「液状化状態」になる過程である。そうした場合、カオス、あるいは終末のイメージとしての「泥の海」の誕生は、地震からのイメージではないかとも考えられる。

なま心ありける者ども、「今より後は、猶^{のち}も大事あるべし。『来たる四日には、大ゆりして大地ひきさけ、泥わきいで、家々のこらずくづれ、人種あるまじき』と占^{うらな}ひいだしたり」と沙汰しければ、町人共はいふに及ばず、やごとなき上^{うへ}つ方^{がた}まで、禁^{きん}中^{ちゆう}の焼^やけあとに小屋をかまへ、杉^{あをば}の青葉にて四方をかこみ、苫^{とま}をもつて上をおほひ、御殿^{ごてん}を出でてうつり住ませ給ふ。(中巻一章、41-42頁)

中巻の一章「五月四日大ゆりの事」で、浅井了意は「知恵の浅い者たちの噂」を紹介している。それは「今後は、さらに大変なことがあるだろう。来る四日には、大地震が起こり、大地が引き裂け、泥がわき出して、家々は残らず崩れ、人間は滅んでしまうであろうとの占いが出た」という噂である。ここで地震による地の裂け、そしてそこから泥がわき出して海のようになり、家や人々が流されていく状況が描かれている。また中巻の二章「伏見^{ふしみ}の城山^{しろやま}南へ移り行きける事」には次のような部分がある。

かの城山^{しろやま}、八十余間^{よけん}に及びて、南に押し移り、田畠^{たはた}多くうづもれたる。その山の跡^{あと}は地形^{ちぎやう}をすりはらひに、水わき出でて、踏めばゆら／＼動きわたり、奈落^{ならく}の底^{そこ}までも落ちいるべき心地^{ぬま}して、沼^{ぬま}のごとくになりたり。うづまれし家どもは、地形より一丈ばかり下になりしを、掘りいりて、家財^{かざい}どもはとり出だし侍^ほべり。(中巻二章、46頁)

ここでは、山が移動し、田畑が埋もれて、その山が元あった跡は地形が擦れて平らになり、水がわき出して、足で踏むとゆらゆらと動き、奈落の底までも落ち入るような感じが沼のようになっていたという。この部分も地震による大規模な土砂崩れと液状化状態による被害を描いていると考えても良いだろう。地震によって地面が沼のようになっていくことを見た人々は、それを「泥の海」として考えた可能性があるのである。『かなめいし』だけを資料にして「泥の海」の誕生の過程を地震による「液状化状態」とであると断言することはまだ早いと思われるが、ここではその可能性だけを指摘しておきたい。

5-3 もう一つの終末のイメージ：「火の玉」「火の雨」

『かなめいし』では「泥の海」とともに「火の玉」あるいは「火の雨」を終末のイメージとして描いているところが二カ所ある。最後にこの終末のイメージについて簡単にふれてみよう。

京の寺町三条のわたりより、南をさして火の玉のとびけるも、そのかたちは瓢のごとく、尻ほそく、色あをく、とび行くあとより、火の煙のごとく火のちりける。「これぞ天火といふものなる。此上に、京中大火事ゆきて、一面に焼けほろぶべし」と、いひいだしけるほどに、身上よろしき人は、「土蔵を立てて財宝を入るれば、たとひ家こそ焼くとも、財宝・道具はことゆへあるまじ」（後略）（上巻十章、38頁）

上巻の十章には地震が起きている途中に現れた光り物に関する事件を二つ紹介している。その二つ目が京の寺町三条に現れた「火の玉」である。これを見た人々は「これこそ天火というものだ。そのうえさらに京中に大火事が起こって、一面焼け滅ぶであろう」と話したのである。これは地震後によく起きる火事とそれによる終末の予見として読むこともできるだろう。また、下巻の三章「妻夫いさかひして道心おこしける事」にも噂を記録している。

「五月四日は大事の日にて、なみふりつつ、大地がさけて泥の海になるか、しからずは、火の雨がふりて一面に焼けほろぶるか、いかさま世の中滅すべき境目也」といひはやらかす。（下巻三章、78頁）

この噂は再び来る地震とそれが招く終末を予想するもので、五月四日に地震で「大地が割れて泥の海になるか、さもなければ、火の雨が降って一面焼け滅ぶか。いずれにせよ、この世が滅びる境目だ」という内容である。ここでは、地震による終末後の「泥の海」と「火の雨」で起きる火事による終末が提示されている。「火の玉」や「火の雨」が地震とともに発生する「火事」を意味する可能性が高いと考えられるが、このイメージも他の資料をさらに検討することで、どのような終末のイメージなのか明確になるだろう。大火や火山噴火の資料が参考になると思われる。

6. 終わりに

本稿では、災害という非日常的な事態がもたらす宗教的認識と実践を、とくに「災害除けの呪

術と信仰」そして「災害終末」という観点から江戸前期の「災害見聞記」である『かなめいし』を分析した。1662年に京都を中心とした地域で起きた地震災害で、人々は「世なおし」という地震止めの呪文を唱えながら、札を家に貼ったり、神社に参詣して神子を通して神の託宣を求めたりしたのである。そして当時、鹿島大明神が要石で地震を起こす竜を押えているという鹿島信仰の物語も広く知られていた。一方、そのような災害除けの呪術を行いながら、人々はあまりにも非日常的で強力な力の経験から「終末」を予見したのである。その具体的なイメージが地震によって「泥の海」になるのか、「火の雨」によって焼け滅ぶのかということであった。

ここで、ひとつ重要な問題が浮かぶ。『かなめいし』の最初の部分である地震勃発の際に唱えた「世なおし」の呪文とその時に感じた「泥の海」になる終末の予感との関係である。本稿では、「世なおし」の呪術と「泥の海」の終末を別の章で別の問題として取り上げたが、「世なおし」の意味を解明するためには、一緒に登場する「泥の海」の終末の意識を考慮しなければならない。とくに、18-19世紀に発生する民衆宗教・新宗教の教義のなかで、「世なおし」が語られており、「泥の海」が世の始まり、あるいは世の終りとして描かれている点を考慮するとさらに重要な問題となる。教団宗教として成立していく新宗教とその背景になる民俗宗教との関連はすでに従来の研究者によって指摘されてきた⁽³³⁾。そのような繋がりを考えるためにも『かなめいし』を通して考察した災害除けの呪術や終末観は重要な意味をもつ。従来の研究で強調されてきた民衆宗教・新宗教の変革的な性格や終末論的な側面が、近世民俗宗教史における「災害」への認識と実践と緊密な関係にあることが明らかになるならば、その「変革」や「終末」に対する新しい解釈の可能性も開かれるだろう。また、まだ十分明らかにされていないところが多い近世の民俗宗教史自体においても、災害を中心とするアプローチは、日常や非日常の人々の宗教的認識や実践の姿に新しい光を当てる可能性が高いと思われる。本稿では地震の災害見聞記である『かなめいし』だけ取り上げたが、同じ作者の大火の災害見聞記である『むさしあぶみ』のみならず、飢饉・火山噴火・水害などの災害見聞記からも災害除けの呪術や終末観、そして本稿では取り上げていないが、大量死者発生による「慰霊」の問題も考えなければならないと思われる。こうした問題を今後の課題として取り組むつもりである。

註

- (1) 日本の場合、小学館の『日本国語大辞典』(2006)を参照すると「災害」や「災い」という言葉の使用は8世紀まで遡り、『万葉集』や『日本書記』に見られる。そして「天変地異」や「天変地妖」という言葉も10世紀には使われていた。日本における「災害」という言葉の範疇は地震・火山噴火などの自然性が強いものも含むが、伝染病・飢饉・火事、そして戦争や彗星の出現のような不思議な事件も包括している。このような「災害」という概念の歴史的な変遷についてはさらなる研究が必要だと考えられる。
- (2) 現代の災害研究者は「災害」を定義することに難しさを感じている。その大きな理由は「災害」という現象において、「自然性」や「人為性」が複雑に絡み合っており、その上「地域性」とともに「歴史性」も考慮しなければならないからである。自然性が強い事態だけ「災害」とする場合もあるが、心理学者や人類学者、社会学者の中には、集団ストレス状況すべ

てを「災害」として幅広く設定し、人為性が強い「戦争」や「テロ」、さらには「経済不況」まで含む場合もある。だが、日本の「災害」にせよ、欧米の「disaster」にせよ、近代以前には災害を表す言葉の用例には自然性と人為性の区分がなされていなかった。欧米での災害の概念論に関しては、ジュシ・ハンスカの中世災害と宗教に関する研究である Jussi Hanska, *Strategies of Sanity and Survival: Religious Responses to Natural Disasters in the Middle Ages* (Helsinki, Finnish Literature Society, 2002)の序論(Introduction)が参考になる。

- (3) 3・11 東日本大震災後の日本の宗教学の傾向として、被災地での宗教者や宗教団体の救済活動、大量死者発生による慰霊や記憶の問題、震災後の人々の神義論的認識や霊的体验などが中心的なテーマになっていると思われる。『宗教研究—特集〈災禍と宗教〉』(86 巻 2 輯, 2012 年), 国際宗教研究所編『現代宗教 2012—「特集」大災害と文明の転換』(秋山書店, 2012 年), 国際宗教研究所編『現代宗教 2013—「特集」3・11 後を拓く』(秋山書店, 2013 年)などの研究がその例である。
- (4) 震災予防調査会編『大日本地震史料 甲・乙巻』震災予防調査会, 1904 年; 武者金吉編『日本地震史料』毎日新聞社, 1951 年; 東京大学地震研究所編『新収日本地震史料 1-6 巻・別巻・補遺』東京大学地震研究所, 1981-1994 年などが地震災害に関する代表的な史料集である。最近の研究としては、北原糸子・松浦律子・木村玲欧編『日本歴史災害事典』吉川弘文館, 2012 年などもある。
- (5) コルネリウス・アウエハント『鯰絵——民俗的想像力の世界』小松和彦ほか訳, セリカ書房, 1979 年(英語の初版は 1964 年); 北原糸子『地震の社会史——安政大地震と民衆』講談社, 2000 年(初版は 1983 年)。
- (6) 拙稿「日本の地震信仰と鯰絵の研究——1855 年の安政地震と世直し」(ソウル大学宗教学科修士学位論文(韓国語), 2012 年)。
- (7) 鴨長明『方丈記』, 神田秀夫校注・訳『新編日本古典文学全集 44』小学館, 1995 年; 鴨長明『方丈記現代語訳付き』, 築瀬一雄訳注, 角川文庫, 2010 年(初版は 1967 年)を中心として参照した。
- (8) 大隅和雄『方丈記に人と栖の無常を読む』吉川弘文館, 2004 年; 歴史と文学の会編『新視点徹底追跡 方丈記と鴨長明』勉誠出版, 2012 年。
- (9) 浅井了意『かなめいし』, 井上和人校注・訳『新編日本古典文学全集 64 仮名草子集』小学館, 1999 年, 66-67 頁。引用の中の「なゐ」と以下の引用での「なゆ」は「地震」の意味である。
- (10) 同上, 12 頁。
- (11) 土田衛編『愛媛大学古典叢刊 8 かなめいし』愛媛大学古典叢刊刊行会, 1971 年。
- (12) 中村幸彦「仮名草子の説話性」『近世小説史の研究』桜楓社, 1961 年; 水江漣子「仮名草子の記録性——『むさしあぶみ』と明暦の大火」(『日本歴史』1972 年 8 月号); 坂巻甲太「浅井了意試論——『むさしあぶみ』『かなめいし』をめぐって」(『近世文芸研究と評論』5 号, 1973 年); 小川武彦「仮名草子四篇に見る天災地変の文芸性と記録性」(暉峻康隆編『近世文芸論叢』中央公論社, 1978 年); 坂巻甲太「報道作家としての浅井了意」(暉峻康隆編『近

- 世文芸論叢』中央公論社，1978年）；小原亭『『かなめいし』の文芸性——虚構化の方法をめぐって——』（『立命館文学』592号，2006年）；小原亭『『かなめいし』の文芸方法——中・下巻を中心に了意の創作意図を探る——』（『日本文藝學』48号，2012年）。
- (13) 『かなめいし』の記録性に関しては，註12の小川武彦の研究，文芸性に関しては小原亭の研究を参照のこと。
- (14) 宮田登『『世直し』の原義——歴史学と民俗学の接点から』（竹田聰洲博士還暦記念会編『日本宗教の歴史と民俗』隆文館，1976年）。
- (15) 浅井了意，前掲書，70-71頁。
- (16) このような地震理解は『中阿含經』の「地動經」に基づいている（同上，70頁の註11を参照のこと）。中世には『中阿含經』とともに『大智度論』の地震説もよく知られていた（黒田日出男『竜の棲む日本』岩波書店，2003年，116-125頁）。
- (17) Hanks, op.cit., pp. 32-47.
- (18) 私が数えた限り，「よなおし」という表現が出ている鯰絵は22点ある。
- (19) 地震学者の武者金吉が「地鯰居士雑筆」（『地震 第1輯』Vol. 11 No. 11，1939年，541頁）で簡単に述べたことが最初の指摘である。それを地震学者の今村明恒が引用してから広く知られるようになる（今村明恒「災害除け」『鯰のざれごと』三省堂，1941年，181-186頁）。この呪文以外にも，土佐では「かはかは」，沖縄の石垣と那覇では「きょうつかきょうつか」という文句が唱えられたという。
- (20) 柳田國男『海上の道』（1961）『柳田國男全集第1巻』筑摩書房，1989年，115-116頁；コルネリウス・アウエハント，前掲書，48-50頁；宮田登『ミロク信仰の研究』未來社，1975年（初版は1970年），180-231頁；安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』青木書店，1974年，87-146頁。
- (21) 田村栄太郎『世直し』雄山閣，1960年；佐々木潤之介『幕末社会論：「世直し状況」研究序論』塙書房，1969年；庄司吉之助『世直し一揆の研究』校倉書房，1970年；佐々木潤之介『世直し』岩波書店，1979年；芳賀登『世直しの思想』雄山閣出版，1984年。
- (22) 中世末期から江戸前期の間に成立されたと思われる謡曲『道成寺』の中には「みどもは地震かと思うて，揺り直せ揺り直せと言うた事ぢや」（作者不明『道成寺』，小山弘・佐藤健一郎校注・訳『新編日本古典文学全集 59 謡曲集 2』小学館，1998年，293頁）という部分があり，「よなおし」やそれに類似した呪文が中世末期にはすでに唱えられていた可能性が高い。
- (23) 以下，『かなめいし』の引用は『新編日本古典文学全集 64 仮名草子集』（小学館，1999年）の頁を基準とする。
- (24) 「世直し大明神」として崇められた人物として，天明四年に田沼意知を襲撃した佐野政言，天保八年の「大塩の乱」の指導者である大塩平八郎，慶応二年の奥州信達一揆の指導者である菅野八郎などがいる。
- (25) 本稿で引用する鯰絵の番号は，宮田登・高田衛監修『鯰絵——震災と日本文化』（里門出版，1995年）で付けた番号を基準とする。
- (26) 黒田日出男，前掲書，133-168頁。
- (27) Bruce Lincoln, “ ‘The Earth Becomes Flat’ : A Study of Apocalyptic Imagery,”

Comparative Studies in Society and History 25, 1983, pp. 136-153. この研究で宗教学者ブルース・リンカーンは、「大地が平らになる(The earth becomes flat)」という内容を含む古代イランの宗教の三つのテキストを取り上げ、コンテキストによってそれらが肯定的な意味での「宇宙論的な更新」、あるいは否定的な意味での「終末論的な災難」を象徴していると解釈している。「地震」という言葉は出ていないが、地震のようなイメージとして考えることはできるだろう。

- (28) Norman Cohn, *The Pursuit of the Millennium* (Oxford, Oxford University Press, 1970 ; first published in 1957) 江河徹訳『千年王国の追求』紀伊国屋書店, 1978 年。
- (29) Michael Barkun, *Disaster and the Millennium* (London, Yale University, 1974) 北原糸子訳『災害と千年王国』新評論, 1985 年。
- (30) 政治学者たるパークンは災害の基準を「集団ストレス状況」として捉え、自然災害にとどまらず、社会的な災害・人為的な災害まで含めてその範疇を広く設定する。さらに社会運動としての千年王国運動の分析に重点をおき、千年王国運動の宗教的な側面についてはそれほど深く考察していない。また、理論化の作業が具体的な災害と千年王国運動に関する事例分析と緊密に繋がっておらず、説得力が弱いという批判も受けている（『災害と千年王国』, 352-359 頁の訳者のあとがきを参照）。
- (31) 北原糸子『地震の社会史——安政大地震と民衆』, 230-249 頁。
- (32) 富士講, 如来教, 天理教, 大本教の教義に表れている「泥の海」に関してはさらなる考察が必要だと思われるが、まず、宮田登の『終末観の民俗学』（筑摩書房, 1998 年（初版は 1987 年））の二章「世の終りの伝統」が参考になる。
- (33) 歴史学・思想史学からは村上重良や鹿野政直, 安丸良夫の「民衆宗教論」に対する桂島宜弘や神田秀雄の批判のなかで、宗教学からは島藺進の「新宗教論」のなかで、その背景になる「民俗宗教」が強調されてきた。桂島宜弘「民衆宗教研究・研究史雑考」（『日本思想史学』34, 2002 年）；神田秀雄「民衆宗教の成立と近世社会」（『日本思想史研究会会報』30, 2013 年）；島藺進「民衆宗教か、新宗教か——二つの立場の統合に向けて」『江戸の思想 1 救済と信仰』ペリかん社, 1995 年を参照。